
テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー ～吸血鬼物語～

サニーレタス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブザワールドディアントマイソロジー〜吸血鬼物語〜

【Nコード】

N6388Y

【作者名】

サニーレタス

【あらすじ】

吸血鬼・・・

ここ、ルミナシアではそんな存在は空想、または御伽噺とされていた

そして誕生した・・・

イレギュラーな少年の物語・・・

作者初投稿です・・・よろしく願います

第1話（前書き）

作者初投稿です^^

できるだけ良い作品にしていきたいと思いますので感想、アドバイスを良ければしてやってください・・・

第1話

ウリズン帝国・・・

そこで、ある物語が始まった・・・

NOSIDE・・・

彼・・・

顔は中性的、そして長い黒髪を後ろで束ねており・・・少し暗さを帯びた青い瞳を持つ彼・・・。

名前はイザック・フーバー

生まれてすぐ親に捨てられてウリズン帝国の城下町の孤児院で育った

フーバーは孤児院の先生がくれた名字だ

そして彼は学校に通いながら仕事をし、いままで孤児院で暮らし

ていた
だが・・・

イザックSIDE・・・

「失礼します」

俺はある部屋に来ていた

先程仕事が終わりに、孤児院に帰ってきたので部屋に行く途中
みんなから先生と呼ばれているリン先生が深刻な顔をして

『後で私の部屋に来な・・・』
と言われたからだ

そして先生の部屋に入るとそこには見知らぬ二人の騎士団の男が
立っており

先生の顔は苦虫を噛み潰したような悔しそうな表情をしていた
そして先生が・・・

「・・・イザック・・・今日からあなたは王立研究所の博士に引
き取られることになりました・・・」

そう言われた・・・
一瞬、体が固まった

「・・・何故ですか？」

俺は先生に尋ねた

孤児院は俺の家だ、今更誰かに引き取られるなんてゴメンしたいし
何よりこの孤児院を出て行きたくない

何より「引き取られることになりました」と先生は言ったが

・・・何故決定事項なのだ？

俺の意見も聞かず、強制的に連れて行こうとしている

しかも王立研究所は悪い噂が多い

最近では人を実験体にし、鬼畜な実験を行っているとか・・・

少なくともそんな噂が立っているところに望んでなんて絶対行きたくない

俺がそう考えているうちに騎士の一人が先生の代わりに答えた

「皇帝陛下直々の命令だ。研究所まで連れて行く・・・逃げれば・・・わかるな？」

こうして脅迫をしてくる時点でおかしかった

しかし・・・孤児院に・・・何より、恩人である先生に迷惑を掛けたくなかった

俺は要求を呑むしかなかった・・・

NOSIDE・・・

「陛下・・・例の実験の代わりを用意できました」

金髪で目に縦の切り傷がある男が言葉を発する

陛下と呼ばれた人

豪華な衣に体を包み、黒い髪の上には豪華な王冠をかぶっている
ウリズン帝国皇帝のガンドである

「うむ・・・早速行くぞ」

「はい、今度こそ成功させます」

「当たり前だ!!」

実験の話をしている男性を怒鳴りつける

「私をいつまで待たせるつもりなのだ!!もう十二回目だぞ!!」
「!」

「はい、承知しております」

「・・・で?今回の”実験体”はどんな奴なのだ?」

怒鳴っても仕方が無いと思ったのか、王はまた実験の話に戻る

「・・・イザック・フーバー。17歳、180cm 66kg、生まれてすぐに

親に捨てられ、孤児院で育っています。孤児院の者には一応話を通しました

渋りましたが脅して口止めもしてあります。それに陛下と同じような体格ですので実験体には最適かと・・・」

「ふん・・・なら早く始める・・・」人体吸血鬼化実験”をな・・・」

にやりと歪めた口元にはとてつもない欲望が見えていた・・・

イザックSIDE・・・

あれから、お城の研究所に連れて来られた俺は兵士が言うがままに動いていた

そして俺の目の前に二人の男が現れた・・・

NOSIDE・・・

「・・・・・・・・」

「この餓鬼か？」

「はい、この少年がイザック・フーバーです」

ガンドがイザックを指差し金髪の男に問いかける

「ふん、悪いが・・・少し眠ってもらうぞ」

そうガンドが言い放った直後

「・・・・・・・・!?」

「・・・・・・・・ハッ！」

皇帝の横に立つ金髪の男が突如こちらに突進してきた

掛け声と共に突き出された拳をイザックは何とか受け流すが・・・

「ハア！」

「がはっ!？」

次の蹴りは先程の拳とは段違いに速く・・・重かった

腹にもろに蹴りをくらったイザックは為す術無く倒れる

「（こゝ、こいつ・・・）」

・・・孤児院でも、町でもどんな奴にも負けたことは無いイザッ

クは

その事実を信じられないでいた

学校の剣術、格闘術の授業では常に一番、大人にも負けたことが無いイザックだったがこの男は

油断していたとはいえイザックを一撃で立てなくしてしまったのだ

「ふむ・・・まだ意識があるか・・・」

「が・・・お前・・・なにもん・・・」

ここまで言い、イザックは気絶した

「・・・運べ」

そして気絶したのを確認するとガンドは研究室内に運ぶように命じた

第1話（後書き）

難しいです・・・

ぜひともご意見待ってます!!

第2話（前書き）

2話目です・・・
難しい・・・ほんとに・・・

第2話

イザックSIDE・・・

「・・・・・・・・ここ、は？」

真っ暗で何も見えない・・・

恐らくどこかの大きな部屋だろうか・・・

「・・・・・・・・つ・・・」

動こうとしたが手と足を拘束されていた
強い力で縛っており、解けそうに無かった・・・
そこに・・・

「・・・・・・・・！？」

急に電気がつき、まぶしさに目を細める

周りを見ると古い感じで周りの壁には石が詰められていた

「ここは？」

「目が覚めたようだな」

「・・・・・・・・！？」

上のほうから声が聞こえた

見るとそこには踊り場があり二人の人・・・ガンドと金髪の男が
立っていた

「……………何をするつもりだ」

「ふん……愚民め、口を慎め」

「……いきなり連れて来られて、こんな扱いをされて……事情くらい知る権利は俺にはあるんじゃないか？」

苛立ちを抑えながら状況を問う

そして返ってきた言葉は……最悪のものだった

「……お前には、ウリズン帝国繁栄のための……そして……私の永遠の命の

ための実験体になってもらう……人体実験のな」

にやりとゆがめた口元を見て、背筋に悪寒が走った

「（逃げるしか……）」

必死に拘束から逃れようと腕を動かす
しかしやはり解けそうな気配は無い

「……おい、始めろ」

「はい……」

そして……最悪の実験が始まった

「おらあ！」

「っ!？」

いきなり頭をつかまれ床に叩きつけられた
額からは血が流れてきた

「きひひひ・・・初めまして、イザック君」
「・・・誰だ？」

気持ちの悪い声で俺の名前を呼んだ男は床についている俺の顔を強引に上げると

気持ちの悪い笑みを浮かべた

「私の名前はエリック、今からこの、私が長年研究し続けてやっ
と完成した

『アムリタ』を投薬しますね？きひひひひ・・・」

エリックは君の悪い笑いと共に・・・真っ赤な液体、『アムリタ』
を注射器に

入れる・・・

「ちなみに・・・今残念ながら、11人失敗しています。あなた
は成功してくださいね？きひひひひひ」

今・・・なんて言った？

11人失敗？

マジかよ・・・成功するのかほんとに？

「みんな『アムリタ』の拒否反応に耐えられなくて死んでしまっ
んですよ・・・薬が全くもったいないですよ、きひひ」

もう俺の中には恐怖しかなかった
そして・・・こう思った

死にたくない・・・」と・・・

「じゃあ・・・いくよ！！」

そして・・・俺の腕に注射器が突き刺さり・・・
真っ赤なその液体が俺の体内に流れ込んできた

[illegible]

突如……激痛が俺を襲った……

体は焼けるように熱く、視界が真っ赤に染まった

吐き気がし、
たまらずに吐血をする

頭が割れるように痛く、どれだけ叫んでも痛みは治まらない・・・
永遠に続くかと思われた痛みだった・・・
しかし・・・急にそれがふつと和らいだ

「あ・・・あああ・・・」

叫びすぎて喉が潰れたのだろう声が全くでない

そしてエリックは感極まったように

「成功だよおお！！！！」

と、不快な笑みを浮かべて喜びの声を上げた

それを見た・・・俺は・・・

急に・・・アイツヲ・・・コロシタク・・・ナッタ・・・

金髪の男SIDE・・・

「おお・・・せ、成功したのか!？」

「・・・そのようですね」

隣で驚愕に顔を染めるガンド陛下・・・いや、クズ

「よし、エリック!その薬をわしに!!!」

「きひひ、もちろんですよ皇帝陛下『ザシュ』か・・・？」

クズが薬を求めエリック博士を呼んだ瞬間・・・

エリックは言葉を止めた

いや、止められた

何故なら少年の手刀がエリックの胸を突き刺していたから・・・

すげえな・・・流石に大人一人手刀で突き殺すのは俺でも無理だ

「なっ・・・!？」

「(はは・・・面白くなってきた)」

ぺろ、と唇をなめる

さあ・・・久々の戦闘を楽しみましょうか・・・

第2話（後書き）

見てくれた方には感謝を！

誤字脱字などがありましたら教えていただけると幸いです（汗）

第3話（前書き）

初戦闘・・・どうか批判だけは勘弁を><

第3話

NOSIDE・・・

「がぁ・・・ひい・・・!」

悲鳴も上げれずエリックは目から光を失い、倒れた
そして持っていた『アムリタ』も落ち、容器が割れて地面に染み
込んでいった

「あああ!! 『アムリタ』が!!!!・・・おのれ・・・小僧!!
!!!!!!」

イザックは腕に流れてきた血をぺろりと舐めした
・・・彼らからは見えなかったのだろう・・・イザックの口元が
緩むのを・・・

ガンドは目を見開き絶望した後、怒り狂って

「殺せ!! 八つ裂きにしろ!!!!」

そう近衛兵に命令した

それと同時に十数人も近衛兵が部屋に入ってきて、最初から居
た兵士合わせると
二十人程となった

そして・・・

「おらぁ!!」

「ハッ!!」

二人の兵士がイザックを殺そうと飛び出した
一人は突き、一人は上段から剣を振り下ろした・・・が
その二つの剣はイザックに斬り裂くことはなかった・・・

パキン、という音と共に剣を振り下ろした兵士の剣がイザックの
手に掴まれ・・・

粉々に壊れた・・・

そして突きを繰り出した兵士の剣は地面に落ちていた・・・
腕ごと・・・

「なっ!?!」

「ぐああああ・『バキイ』ぐえ・・・!」

剣が壊されたことにより驚愕する兵士、その間にもう一人の兵士
は痛みに絶叫した 直後・・・イザックに顔面を殴られ・・・首が
無くなった・・・

否、上から殴ったため首の骨が胴体に陥没してしまったのだ・・・
どちらにせよその一撃で絶命し、その男の剣がイザックに渡った
そして

「・・・瞬迅剣」

イザックの繰り出した一撃はもう一人の兵士の胸を貫くには充分
な一撃だった

悲鳴を上げる前にその男も地に伏せた・・・

そして・・・イザックによる近衛兵たちの惨殺劇が始まったのだ
った・・・

金髪の男SIDE・・・

「な・・・わ、我が国の近衛兵が・・・」

惨殺劇が始まって十分・・・

少年・・・イザック・フーバーの周りには死体、そして、致命的な傷を負ったものしか残っていなかった・・・

「お、お前だけが頼りだ。行け!!」

「・・・拒否します」

「は・・・?」

クズは俺に命令してきたが・・・もう聞いてやる必要も無い

「・・・クロス・・・」

「ひっ!?!」

いつの間にかこちらの踊り場が上がってきた少年
それを見てクズは小さな悲鳴を上げる

「クロス・・・」

「た、助けてくれえ!!」

「クロス・・・」

「なんでもする、なんでもしてやる。か、金か?」

「クロス・・・」

「金でも何でもくれてやるから・・・頼む!!殺さないでくれえ
ええ!!!!!!」

「クロス!!!!!!」

クズが叫んだと同時に少年は剣を振り上げ・・・クズの首が胴体
とお別れした

「・・・やるねえ」

口笛を吹きながらそっぴんが反応が無い

そして少年はぎろりとこちらを数秒睨み、突然笑みを浮かべたか

と思うと

．．．人とは思えない速度で襲い掛かってきた

第3話（後書き）

やばいです・・・難しいです・・・

誤字脱字ありましたら報告してもらえるとありがたいです

第4話（前書き）

更新です^^；

見ていただくと幸いです

第4話

NOSIDE・・・

「アアアアアア！！！！」

狂ったように剣を振り回すイザック

その剣の速度、技術は『アムリタ』を飲む前のものとは格段の違っていた

そうでなければあの数の近衛兵たちを倒すことはできなかっただろう

しかしその剣技を・・・金髪の男はいつも簡単に弾き返していた・

「よっ・・・ふん！！！」

「・・・！？」

袈裟懸けに斬り下ろしたイザックの剣を金髪の男はバックステップで避ける

そして、先程の近衛兵のものとは比べものにならないくらいの突きをイザックに
繰り出す・・・

その一撃はイザックの頬を掠め、イザックは横に飛び退き距離をとった

「・・・薬の効果か・・・傷がもう治ってきてるじゃねえか」

金髪の男は楽しそうにそう言う

見ると先程の頬を掠めた一撃は見る見るうちに回復していく

「吸血鬼・・・か・・・あのクソ野郎、気に食わなかったけど面白いもん残して言ったな・・・」

そついうと笑みを深めて舌なめずりをした

「俺の名前はキラ。キラ・エクスだ・・・覚えとけよ？」

金髪の男、キラはそう言い終わるとまた剣を構えた

「さあ・・・楽しませてくれよ？・・・魔神剣！！」

そして、また戦闘が始まった

「・・・（ギイン）・・・陽炎」

「おおっと！」

イザックはキラの魔神剣を剣で弾くとキラの真上に瞬間移動してから膝落としを繰り返す

「守護方陣・・・」

「ぐはっ！」

それをバックステップで避けるが守護方陣によりダメージを受ける

「ちっ・・・雷神剣！」

「（ガキン）・・・！？」

だがそれでは終わらずキラは剣を突き出し落雷がイザックを襲った突きは剣で弾けたものの落雷を受け、全身にダメージと痺れを受ける

「ちっ・・・薬飲んだとはいえまさかガキに一撃いられるとは・

「・・・」

「・・・・・・」

「まあ・・・いいや・・・それならこっちも、ちょっとばかり本気を出そうかな」

「・・・!？」

一瞬でキラの雰囲気が変わる

「俺・・・実は魔法剣士なんだよね・・・」

そう言い終わると突如、キラの足元に魔法陣が浮かびだした

「・・・長年修行を積んで・・・やっとできるようになったんだよな・・・」

『詠唱待機』は誰にだってできる、しかしそれは、その間行動ができないという

弱点がある・・・そこで俺は・・・『遅延魔術』を習得したんだよ・・・」

殺気の密度が上がり、思わずイザックは後ずさりする・・・

「詠唱時間は普通の三倍強掛かるが・・・剣術もそれなりに使える俺にはたいしたデメリットのはならない・・・そして、お前がここに上がって来た時すでに詠唱は始まってんだよ!!!!!!」

キラはまた笑みを深くし

「耐えろよ・・・行くぜ・・・!!!!!!・・・インディグネイション!!!!!!」

・ 刹那、研究室に裁きの雷落とされ、周りは土煙に包まれた……

崩れた研究所の瓦礫の上に立つ人影……

「……やり過ぎた……しかも逃げられた……」

はあく、と溜め息をつくキラ

「まあ……いいか。とりあえず戻るか……」

そして歩いていく

ふと、キラは足を止めた・・・

「次会うときは・・・もっと楽しませてくれよ・・・イザック」

そう呟くと今度こそ歩き出し、研究所から姿を消した・・・

イザックSIDE

「はあ・・・はあ・・・はあ」

イザックは走っていた足を止め、息を整える

「（なんだ・・・さっきの感覚・・・）」

あの・・・エリックとか言う男を・・・いきなり殺したいという
衝動が襲った

そして、気が付くと殺してしまっていた・・・
そしてそれを・・・心から楽しいと思ってしまった・・・
それからは、体が言うことを聞かなかった・・・

イザツクは思い出していた・・・
人を斬った、あの感覚を・・・

「（俺は・・・）」

やるせない気持ちに俺は拳を強く、強く握り締めた

そして、雨だ振ってきた音と共に城では研究所が破壊されたこと
による騒ぎが起こっていた・・・

第4話（後書き）

インディグネーションを使わせたのは・・・作者が好きだからです
^^

かつこよくないですか？インディグネーション^^

誤字脱字がありましたら報告お願いします
もちろん感想もしていただけると嬉しいです

第5話（前書き）

とりあえず更新へへ；

第5話

NOSIDE・・・

「なんだ・・・これは・・・」

騎士を十人ほど引き連れた恐らく騎士団隊長と思われる男が呆然としながら呟いた無理も無いだろう・・・

いきなり轟音が鳴り響いたと思えば、城の敷地内にあつた研究所が瓦礫の山になっているのだから・・・

「だ、団長・・・」

「なんだ・・・っ!？」

一人の騎士に呼ばれそちらを向くと兵士の目線の先には・・・皇帝の生首が

転がっていた・・・

「へ、陛下・・・一体、何が・・・」

転がる首を見ながら呆けていると

「隊長!!この近衛兵まだ息があります!!!!」

そんな声が聞こえた・・・

団長はすぐさま声を上げた騎士の元に走った

「おい!近衛兵!!何があつた!!?」

今にも消えてしまいそうな呼吸をしながらうつすらと目を開けた一人の近衛兵

「・・・極秘・・・じ・・・験・・・しつぱ・・・い・・・被験者・・・逃走・・・」

そこまで言い終わると近衛兵は力尽きた
しかしその情報で団長は全てを悟った・・・

「（実験が失敗したと!?・・・しかも、被験者は逃走?・・・この惨状を見る限り能力を得て逃走した・・・となると・・・）・・・まずいな・・・」

騎士団長も実験のことは聞いていたようだ
そして団長は最悪の結果を想像していた

「・・・おい」

「はっ!」

「今日、ここに連れて来られた被験者の名前は?」

「はっ!、イザック・フーバー、17歳です。私が連れてきたので間違いありません」

「そうか・・・恐らくそのイザックとやらがこの事件を引き起こしたらしい

騎士団全班を召集!その男の身柄を拘束する!至急だ!!急げ!

!」

「はっ!」

兵士は敬礼を済ますと駆け足でその場を去った

「（もし・・・もし吸血鬼化に成功していたら・・・報復にやってくる可能性がある・・・これだけの戦闘を行った今なら拘束できるかもしれない・・・その後は・・・城で幽閉させるか・・・）」

団長は頭を抱えていた

そして、先程から降っている雨が一段とまた強くなった・・・

イザックSIDE・・・

雨が降っていた・・・

しかしそれでも俺はその場所から動けずにいた・・・

人を殺したという事実・・・殺人をしたというのにそのときには
楽しさ・・・

快樂までも感じてしまっていた事実・・・そして・・・返り血を
浴びて・・・

血を口に含んだときの・・・とてつもない力が溢れてきて・・・
制御できなかった事実

そしていつの間にか溜まっていた水溜りに目を向けると・・・イザックは驚愕した・・・

漆黒の闇のように黒かった髪は正反対の雪のように白く染まり、美しい青色をした両目だったのが、左目だけ炎のような真っ赤な赤に染まっていた

そして・・・口をあけると・・・鋭利にとがった・・・犬歯があった・・・

「ああ・・・そうか・・・俺・・・」

もう・・・・・・化け物になっちまったんだ・・・

第5話（後書き）

イザック吸血鬼化・・・

さて・・・この後どうしようか・・・（汗）

まあがんばって更新します^^

誤字脱字の報告、感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第6話（前書き）

とりあえず投稿へへ；

第6話

イザックSIDE・・・

途方に暮れていた俺はただ歩き続けた・・・
気が付くと・・・俺が育った孤児院の前だった・・・

「・・・はは・・・いまさら何しに来てんだか・・・」

自嘲したように笑う

「・・・・・・・・」

そして、孤児院に背を向け歩き出そうとしたそのとき

「イザック!!!」

・・・そこにはいつもの服ではなく戦闘用の軽鎧に剣を携えた孤
児院の先生の姿があった・・・

騎士団長SIDE・・・

「・・・まだ見つからないのか!!」

「す、すいません・・・まだ捕捉できていません」

イライラしながら部下の報告を聞く

このままでは取り逃がしてしまう・・・

一刻も早く被験者のイザックを捕らえなければ・・・

「（あの数の近衛兵を一人で倒した・・・完全に回復してから攻められてはひとたまり無い・・・）」

未知の力を持つイザックに恐怖を覚える団長

だからこそ、今捕まえておきたかった

そこに・・・

「団長!! 被験者イザック・フリーバーを捕捉しました!!!!」

「どこだ!!」

「被験者の住んでいた孤児院前の路地です、三個小隊が今向かい、到着しだい迎撃するようです！」

「よし！全員向かうよう通達！我々も出るぞ！…いいか！？必ず捕まえる！…！」

「「「「「はっ！…！」」「」「」「」

団長の言葉に敬礼を返し、どたどたと音を立てて部屋から出て行った…。

イザックSIDE・・・

「あ・・・」

「イザック・・・」

頭が真っ白になった

「・・・なんで・・・」

「？」

「なんで・・・俺って・・・」

俺は今の容姿を見て一瞬でイザックだとわかった先生に驚いていた・・・

それを聞いて先生は

「あんたの髪の色や眼の色が変わってても・・・何年も一緒にいればさすがにわかるよ・・・」

そついい先生は微笑を浮かべた

「それよりあんた指名手配されてるよ？・・・何があつたんだい？」

「・・・・・・・・先生・・・俺・・・」

そして俺は、ついさっきの出来事をすべて先生に話した

人体実験を受けさせられ、化け物になったこと・・・そしてその力でたくさんの人を殺したこと・・・血をなめると・・・おいしいと感じる・・・化け物になったこと・・・

「・・・俺・・・怖いんだ・・・自分が」
「イザック」

名前を呼ばれ、体が震えた

「大丈夫だ」

そして力強く一言、そう言い放った

「・・・なんで・・・そんなことわかるんですか？」
「あたしは・・・あんたのこと信じてるからさ」

「信じてる」・・・先生はそう言った・・・

「まただ・・・この人は・・・根拠も無いのにそんなことを言って・・・」

「・・・それにどれだけ救われ、どれだけ嬉しかったことが

先生は俺のさっきの話を聞いても・・・変わらずに接してくれた

「先生・・・」

自然と涙が流れた・・・

さっきのような悲しみの涙ではない・・・

「・・・泣くんじゃないよ、全く・・・」

先生は呆れたように言いながらもどこか嬉しそうに微笑んでいた

そのとき・・・

「イザック・フーバーだな？」

くぐもった声が聞こえた

そしてそこには・・・三十人は超える人数の騎士が武器を構え立っていた・・・

第6話（後書き）

・・・先生については説明する回を作ったほうがいいかな？
感想、アドバイスを頂けたら幸いです

第7話（前書き）

はい・・・孤児院の先生が・・・

続きは本文でどうぞ！！

第7話

NOSIDE・・・

「・・・」

「おとなしくついて来い、さもなくば・・・」

一人の兵士がこちらに歩み寄る

「・・・わか「待ちな」・・・!？」

おとなしく捕まろうとしたイザックだったが・・・先生が言葉を
遮り一歩前に出た

「なんだ？」

「・・・この子を孤児院を脅してまで無理やり連れて行って、人
体実験を行いこの子を苦しめたあんたたちに・・・あたしが返す
と思うのかい？」

先生の顔には・・・明らかな怒気が含まれていた

「・・・孤児院がどうなってもいいのか？」

そして、騎士は一番効果的だと思われる孤児院の名前を出した・・・

しかし帰ってきたのはかすかな笑い・・・

「はっ・・・もう他の子達は違う場所に移したよ・・・この子引

き渡してからあたしは助けに行くつもりだったからね・・・大事な
大事な・・・息子をね・・・」

先生は優しくそういった

「先生・・・」

「逃げな、イザツク」

一言、先生はそう言った

「でも先生！この数は・・・」

「大丈夫だよ・・・あんたに剣を教えたのは誰だと思ってんだ
い？」

先生は振り返りイザツクにそう笑いかけた

「・・・いきなり孤児院を人質に取られたから対処できなくて・・・
悪かったね・・・辛い思いをさせて・・・」

「先生・・・」

「港町の近くの森の中にあたしの友人、エルフのルナ、っていう
あたしの古い友人が居るそいつのところにはまずはいきな
ね？」

小声で先生はイザツクに言う

何かを言おうとするが、うまく言葉にできず押し黙ってしまうイ
ザツク

「もう行くんだね・・・囲まれる前に」

「・・・ありがとう・・・ございました」

頭を下げ、そう言った

「・・・早く行きな・・・」

・・・イザックは背を向けて走り出した
だから気づかなかった

先生が涙を流しているのを・・・

「追え!!」

イザックが走り出した姿を見た騎士が声を張り上げ、イザックの
後を追うが・・・

「待ちな」

「邪魔するな!!」

進路を阻んだのは一人の女性

先程イザックを逃がした孤児院の先生である

そして、威勢よく斧を振りかぶりながら突進した騎士・・・

しかし、その斧は先生に届くことは無かった・・・

「がはっ・・・」

・・・いつの間に斬ったのだろうか

斧を持った騎士は脇腹から血を流し、前のめりに倒れる

後続の騎士はそれを見てたじろいだ

「かかってきな・・・あの子が遠くに行くまで・・・時間稼がせてもらうよ!!」

「なめるなあ!!」

「虎牙破斬!!」

袈裟懸けに剣を振るった騎士だが先生は後退することなく、体勢を低くし流れるよ　うな動作で懐に入り込み、技を繰り出した

そして、騎士は反応することも叶わず二回の斬撃を受け絶命した

「・・・」

「次・・・」

その気迫は孤児院の先生をやっているものとは思えないほどのもので

騎士を睨みつけるその目は、視線だけで人を殺せるんじゃないか

と思うほどに鋭くなっていた

「怯むなあ！！連携して攻撃をしろ！！術師、詠唱準備！！」

そして、騎士団と一人の女性の戦いは苛烈を極めるものとなった

騎士団長SIDE・・・

「・・・なんだこの惨状は・・・」

イザック・フーバーが捕捉された場所に着いた団長

そこには、多くの騎士の屍と・・・血塗れで拘束されている孤児院の先生の姿があった

「・・・この女が・・・イザック・フーバーを逃がし、なおかつ騎士団に大きな損害を与えました・・・」

疲れきった声で報告したのは先程指揮を取っていた小隊長である

「被害は？」

「・・・死者23名・・・重傷者3名です」

「・・・」

団長は言葉を失った

先にこの場所に向かわせた人数は32名

しかし、そのほとんどが彼女によって帰らぬ者となっていたのだ

「・・・処刑しろ、その女は危険すぎる」

「はい」

そして・・・騎士は彼女に歩み寄った

「（イザック・・・ごめんね・・・まともな母親できなくてさ・・・）」

「（・・・かばってやれなくてごめんよ・・・あの糞研究者どもにお前を売った

あたしが言うのもなんだけど・・・）・・・幸せになつとくれよ」

その言葉を最後に・・・先生は舌を噛み切り・・・息を引き取った・・・

「・・・自ら命を絶つとは・・・本当に何者だ？この女は・・・」

口から血を流し、呼吸を止めてしまった女性を見ながら、
今やるべきことに集中することにした

「イザック・フーバーを探せ！決して一人で動くな！何かあったら逐一報告しろ！」

「いいな！？」

「ハッ！！！！」

そして騎士達は団長の言葉に敬礼を返した後持ち場に戻った

第7話（後書き）

先生無双・・・になったかな？

感想、アドバイスしてくださると嬉しいです！

第8話（前書き）

短いですが投稿・・・

第8話

イザックSIDE・・・

俺は走った

全力で

するとすぐに町の外に出ることができた

町の入り口で・・・俺は足を止めた

・・・幼くして捨てられていた俺を、一生懸命育ててくれた先生

・・・剣に興味を持った俺に嬉しそうに剣を教えてくれた先生

・・・最後まで・・・俺のことを考えてくれた先生

そんな先生に・・・感謝を込めて・・・

「・・・ありがとうございました・・・」

震える声を絞り出しながら深く、深く頭を下げた・・・

きつと先生に会うことは二度とないだろう

だからこそ・・・深く、深く感謝をした・・・

先生に助けられたこの身を大事にしていくことを心に誓って・・・

そして、先生に言われたとおり、港町の近くにある森に向けて走り出した

NOSIDE・・・

無事に町を脱出し、港町近くの森を着いたイザック

そこには、暗い雰囲気のある森があった

「ここか・・・」

イザックは一歩足を踏み出し森の中に入っていった・・・

時々襲ってくる魔物を撃退しながら森の奥へと歩を進めるイザック

「・・・何処にいるんだろ？」

案外広いこの森を探し回るのは少々きついものがあった
そんなことを考えていると

「・・・誰だ？」

突然とても澄んだ女性の声が聞こえた
その声音は明らかに警戒を含んだものだだった

「・・・俺はイザックといいます・・・孤児院の先生に言われて
エルフのルナさん

がここにいて聞いて来ました」

「孤児院の先生・・・？・・・まさか」

すっと木の影から姿を現したのは女性

長い銀髪をポニーテールにしている、整った顔立ちだがエルフの特徴であるその

長い耳が印象的だった

「まさか・・・リンの孤児院の子か？」

「・・・はい」

イザックは女性の問いにはっきりと答えた

「・・・来な・・・事情を説明してもらっよ」

女性は先生の名前・・・リンという名を聞きいまだ警戒しているものの

話を聞いてくれるようである

イザックは黙って彼女に従った

第8話（後書き）

新キャラ登場です

テイルズにはハーフェルフの仲間はたくさん出てきますが・・・エルフの人っていたっけ？

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第9話（前書き）

投稿です

見てもらえると幸いです^^；

第9話

イザックSIDE・・・

女性の後を追っていると小さな家が見えてきた

「・・・ここがあたしの家だ、入りな」

「・・・お邪魔します」

ドアを開け、入るように促す女性
俺は一言そう言い家の中に入った

「・・・座りな」

家に入ると中には者がほとんど置いてなく、テーブルと椅子そしてキッチンがある

だけであつた

そして言われたとおり俺は椅子に腰を下ろした

「・・・まず・・・あなたが探してるって言うルナってのはあたしだ・・・

あんた・・・イザックと言ったね？・・・リンがここに人を寄越すなんて

よほどのことでもない限りない・・・それにその目・・・普通の人間のものじゃない・・・何があつた？」

エルフの女性・・・ルナさんはこちらをじっと見たまま俺の返答を待っていた

「その顔を見るとやつぱりそうだね・・・」

はあく、と溜め息を吐きルナさんはこちらを見た

「あんたは・・・」 吸血鬼化実験”の被験者になって・・・成功
しちまったんだね
・・・」

俺はルナさんの言葉を理解できなかった・・・

「エリックって奴はあたしがまだ研究者だった頃に知り合った奴
でね・・・

研究のことになるとにかくやばい奴だった・・・それからあた
しは研究者を

辞めてここで暮らしてたんだけどね・・・一年前、あいつがここ
を訪ねて来たんだ よ・・・『エルフの飲み薬』を寄越せてね」
「・・・・・・」

「はじめは拒否したんだ・・・だけど・・・リンの孤児院を潰す
って言われたら

・・・折れるしかなかったんだ・・・そしたらあたしの血までほ
しいとか言い出し てさ理由を聞いたら・・・あいつはこう言った
よ・・・」

『永遠の命を持つ・・・吸血鬼になれる薬を作るんだよ・・・
キヒヒヒヒヒ』

「・・・気味悪かったさ・・・そして、完成したのが”アムリタ
・・・」

あたしはすぐに解放されて戻ってきた・・・つまりあんたは・・・
” 吸血鬼”

になった・・・ってことだ」

「・・・そんなもの・・・あるわけ・・・」
「あるんだよ・・・」

あるわけ無いと、信じたかった

だがその小さな呟きもルナさんによって否定された

「・・・エリックはね、この世でたった一人・・・錬金術を受け
継いだ奴だったんだ・・・」アムリタ”は錬金術のみで作ること
ができる霊薬で・・・

不老不死の力を得ることができる・・・だから・・・」

そこでルナさんは言葉を切った

理由はわからないが・・・俺の頭にはもうルナさんの言葉は入っ
てこなかった

「・・・あんたは・・・血を舐めたかい？」

ビクツと俺は肩を震わせた・・・

「そうかい・・・血を舐めたら体が・・・軽くなっただろう？・・・
・身体能力が上がっていただろう？・・・全部、吸血鬼の衝動なん
だよ・・・」

ルナさんは淡々とそう述べていった

おれは・・・最後の希望を持ってルナさんにこう問いかけた

「元には・・・人間には・・・戻れますか・・・？」

そう問いかけルナさんの顔を見た

数秒、深刻な顔をした後・・・首を振った・・・

横に・・・・・・・・

俺はそれを見た瞬間意識が遠のいていった・・・

ルナSIDE・・・

「・・・酷だったね・・・やっぱり・・・」

いろいろあったのに加えていきなり化け物といわれ・・・これだけ考えさせられたら・・・

「・・・リンはきつと・・・」

旧友の彼女を思い出す

清楚なイメージだった第一印象とは裏腹に、やんちゃで活発で責任感が人一倍強かった彼女は・・・今

「（・・・エルフの耳って・・・こういう時・・・嫌だよね）」

彼、イザックが来てから町の情報を聞いていた

エルフは耳がいい

ルナは耳を強化し、町で出ている情報を探っていた
その情報のほとんどが彼の搜索結果だったが・・・
その中に・・・

『孤児院の先生が騎士団に反逆し、死亡』

こんな情報が聞こえてきた・・・

「（リンは・・・優しすぎるよねきつと）」

この子が追われているところを見ると・・・逃がすために時間を稼いだのだろう

そして・・・私のところに来させた

そしてリンは・・・責任感と愛情を胸に・・・死んで行ったのだ
ろう・・・

「・・・安らかに眠りなよ・・・しばらくの間は・・・この子を任されてあげるよ・・・」

親友の死に流れる涙を拭おうともせず、ただただ涙を流し続けた・

•
•

第9話（後書き）

暗い話でした・・・

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第10話（前書き）

イザツクの眼の話です・・・

批判とか来ないか心配です^^^；

第10話

イザックSIDE・・・

暗い・・・暗い場所だった

目を凝らして周りを見るがやはり何も見えない・・・

突然・・・明かりがついた・・・

そこには・・・

「”アムリタ”ですよ・・・キヒヒヒヒ」
「っ!？」

そこには右手にあの時の薬、”アムリタ”を、そして左手に・・・
首を抱えている

エリックの胴体があった

その姿に思わず小さく悲鳴を上げる

「実験体になれ・・・愚民め!!」

「やめろ!」

そしてもう一人・・・こちらはガンド皇帝・・・同じく首を持っている・・・

「さあ・・・」

「さあ・・・」

「「さあああああ!!--!!」」

「やめろおおおお!!--!!!--!!」

「つつつ!?!」

「!?!」(ビクッ!!!!)

「……………あ?」

周りを見ると…………見知らぬ部屋に一人の金髪の少女が泣きそうになりながら立っていた…………

「(夢…………か?…………っ、それより…………)…………悪い…………
びつくりさせちまったな…………」

「…………大丈夫…………です」

少女は涙目のままながらもそう返してくれた…………

「…………ルナさん…………呼んできます」

そう行つて少女は部屋を出て行つた

数分後・・・

「起きたかい？」

「はい・・・すみません」

「謝ること無いさ」

先程と違い、柔らかくなつた雰囲気でルナさんは笑いかける

「・・・気分は？」

「・・・正直、悪いです・・・」

「・・・だろうね・・・はい」

ルナさんはおもむろに俺に何かを差し出した

「・・・これは？」

「眼帯だよ・・・あんたその左目の影響で魔力を常に消費してるんだよ」

ルナさんは俺の左目・・・色が変色したほうの目を指差しながら

「あんたの目・・・かつて、吸血鬼が持っていたとされる眼・・・いわゆる”魔眼”ってやつだね・・・その眼には能力があるんだ」

「能力？」

「ああ・・・一つは暗示と幻覚、異性には先の二つと共に好意の錯覚をもたらす能力」

「二つ目は身体能力の増加、これは解放して無くても一緒だけど・
・
解放したときとは比べものにならないから」

「三つ目は・・・得意属性の見分け・・・今のあなたの目はその
状態になってる

右目閉じてみな・・・」

言われたとおり右目を閉じると・・・

「・・・!？」

「あたしはどんな感じだい？」

「・・・ほとんどが青ですが・・・緑と・・・黄色が少し混ざっ
て見えます・・・」

「そうだろうね・・・あたしの得意な属性は水、風と土は基本程
度使える

分かるかい？」

「つまり・・・色で属性が分かれていると？」

「そういうこと・・・赤なら火、青なら水、緑なら風、黄色なら
土、紫なら闇

白なら光、桃色なら回復術、灰色なら補助術・・・そしてその色
の濃さによってどれだけ

強い術を使えるか・・・こういった見分け方ができるのさ」

「・・・よく知ってますね」

「・・・エリックが奪って行った文献の情報だからね・・・」

ルナさんは少し顔を曇らせながらそう答える

「・・・恐らく、その三つの能力があんたの”魔眼”についてる・
・

制御方法はわからないから・・・これから練習するしかないね」

「・・・わかりました、ありがとうございます」

そう言つて俺は立ち上がろうとする・・・が
ルナさんに手で制された

「・・・まだ何か？」

「どこ行くんだい？」

顔を真剣なものにしてこちらを見るルナさん

「もう行きます・・・お世話に「ここにいな」・・・」

別れを告げようとした瞬間言葉をかぶせられ出て行くことを許されなかった

「お話も聞けましたし」

「・・・まだ眼の制御できないじゃないかい」

「・・・これから練習しますよ・・・」

「あんた一人でかい？」

「ええ」

そう答えた瞬間胸倉をつかまれた

「・・・餓鬼が大人ぶってんじゃないよ・・・」

すさまじい威圧感に俺は思わず押し黙った

「・・・そんな顔して・・・そんな心で・・・一人でいようとするんじゃないよ」

「・・・・・・・・」
「あんた・・・リンが困ってたの・・・知ってるかい？」
「？」

ルナさんは少し笑みを浮かべながらこう言った

「『私の息子は・・・どれだけ辛いことされても・・・絶対にあたしに言わない・・・』

子供らしく甘えたっていいのにな」・・・ってね・・・何年か前に来たときにそう言ってたよ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あんたは・・・背負い込みすぎだよ・・・まだ弱いくせに」

ルナさんの威圧が消えて・・・まるで先生のように優しく俺に笑いかけてきた

「・・・・・・・・ここにいな・・・せめて少しでも傷が癒えるまで・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・やつぱり・・・見かけによらず涙もろいんだね」

「え・・・・・・・・？」

いきなりルナさんがそう言いだしたので思わず呆けた声で返事を返す

そして頬を触ると・・・温かい雫が流れていた・・・

「・・・・・・・・リンほど器用に親できるなんて思わないけどさ・・・あんたはもう少し甘えることも必要だよ・・・ずっと気張ってたら・・・・・・・・しんどいじゃないか」

優しく・・・頭に手を乗せながらルナさんはそう言う

「・・・さっきここにいた子の相手もしてあげてほしいしさ・・・
もう少し・・・ここにいなよ・・・」

「・・・はい」

止めたのに・・・止まらない涙

無くなったと思っていた俺の居場所ができた気がして・・・
素直に嬉しかった・・・

第10話（後書き）

どうでしたか？

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第11話（前書き）

今回はリンの弱点（？）が判明・・・

テイルズにはやはりこのキャラがいなくては^^

第11話

イザックSIDE・・・

「・・・すいません」

「いいよ・・・コリイ！おいで」

ルナさんは泣き止んだ俺を見て薄く笑った後、女の子の名前を呼んだ

ドアが開き、そこから姿を現したのはさっきの少女だった

「・・・（ぺコッ）」

少女は俺にお辞儀をしながらルナさんの後ろに隠れてしまった

「こらこら・・・悪いね、この子人見知りする子でさ・・・」

「いえ・・・全然気にしません、しばらくここでお世話になるよ・・・
よろしくね

コリイ・・・」

「はい・・・よろしくお願いします」

小さな声だったがそう答えてくれた

N O S I D E . . .

「・・・コリイ、そっちの皿取ってくれ」

「はい」

「・・・しかし意外だね・・・あのリンの息子なのに料理ができるなんて・・・」

ルナさんは感心したように椅子に腰掛けながらそう言ってキッチンを見る

「・・・先生に作らしたら・・・孤児院の全員の人が食中毒になりますよ・・・」

「だね・・・」

補足すると・・・リンは洗濯や掃除などは完璧だったが・・・料理がからつきしであった

最初は苦笑を返していたイザックだったが先生の料理を思い浮かべた瞬間

顔色が悪くなった・・・

ルナも思い当たる節があるのか青い顔で同意を示していた

「・・・？」

もちろんコリイは何のことかわからず首をかしげていた・・・

「はい・・・とりあえずある材料でしたのが・・・『オムレツ』です」

「・・・美味そうだね」

「・・・美味しそう」

「どうぞ」

「いただきます」

二人は出来上がった料理を口にし・・・ルナさんはイザックを凝視して一言

「・・・ほんとにリンのところで育ったのかい？」

「・・・年長者が作るしかなかったもので・・・」

ありえないものを見ているようにイザツクを見るルナさんに苦笑を返しつつ

コリイに目を向けた

「コリイ・・・どうだ？」

「・・・先生のより美味しい・・・」

「・・・コリイ・・・」

「（ビクッ！）・・・」

その発言にいい笑顔でルナさんはコリイを見た

・・・瞬間コリイはすごい速度でイザツクの後ろに隠れた・・・
オムレツを持って・・・

「ま、まあまあ・・・」

「・・・全く・・・でもほんと美味しいよ」

「良かったです」

はにかんだ笑いを返すイザツク

「・・・明日から眼の制御始めていくから・・・あたしも”魔眼”の制御なんて

初めてだから・・・一緒にやっていこう、いいね？」

優しく・・・安心させてくれる微笑みを浮かべるルナ

「はい」

イザックもまた微笑みながら、ルナの言葉に頷いた

第11話（後書き）

短いですが投稿・・・

テイルズには××料理人がいなくては！！

ちなみにルナさんは違います^^；

一応作れるといった感じです

第12話（前書き）

本日二回目の投稿！！

第12話

ルナSIDE・・・

「・・・」

目が覚めた・・・

私は必ず夜明けには目を覚ます
長年の習慣だ

「・・・顔でも洗ってくるかね」

自分のベットから降り、居間に出ると・・・

「・・・ふぁ・・・おはようございます」

「・・・あんた起きてたのかい？」

イザックがすでに起きており、朝食の準備をしていた・・・

「・・・夜は・・・寝れないみたいです・・・」

「・・・そうかい・・・で？今眠いと？」

「はい・・・」

本当に眠そうな声でイザックは答える

一般的に知られている吸血鬼の印象どおり・・・

吸血鬼は夜に強く・・・朝に弱い

「・・・ま、練習するの夕方にして、後で寝てきな」

「・・・すいません」

大人っぽい印象だったイザックだったが・・・

「（こうしてみると・・・やっぱり年相応だね）」

しっかりした子だと思いがこついった一面を見ると自然と笑みが
浮かんだ

「コリイ起こしてくるよ・・・食べたら寝ときな」

「・・・」

「て・・・もう寝てるのかい・・・」

呆れた視線を送るもイザックは夢の中だ

「・・・ちよつとずつ・・・慣れてくれるかね・・・」

この調子なら心配なさそうだと私は少し安心した

NOSIDE・・・

夕方・・・

ゆさゆさ、と寝ているイザックの体が揺れる

「・・・・・・・・ん？」

「・・・・・・・・ルナさんが・・・・・・・・呼んでいます」

イザックが目を開けるとそこにはコリイが立っていた
外を見ると景色が茜色に染まっている
夕方になったので起こしに来てくれたようだ

「悪い・・・・・・・・ありがとな」

「いえ・・・・・・・・大丈夫です・・・・・・・・」

コリイはまだぎこちないものの笑顔でそう答えてくれた

「すぐ行くって伝えといてくれ」

「（コクッ）」

イザックはコリイにそう言い着替えを始める
コリイは頷くとルナの元に走っていった

「よし・・・あんだ、魔術は使えるのかい？」

「・・・それなりに」

「魔力の制御ってやったことあるかい？」

「いや・・・」

「だろうね・・・その年で制御できてたらたいしたもんだよ」

けらけらとルナは笑う

「瞑想が一番効果的だね・・・とりあえず2時間」

「い、いきなりハードじゃないですか？」

ルナが出した方法にイザックは軽くうろたえる

「・・・いいからやる！ちなみにちゃんとできてるかできてないかはあたしが

見分けることができるから・・・魔力乱れたらこの棒で・・・わかるね？」

とても・・・いい笑顔で肩にごつい棒を担ぐルナ・・・
イザックはから笑いを漏らし・・・現実逃避していた・・・

数分後・・・
鈍い音とイザツクの悲鳴が森に響いたのは言うまでも無い・・・

第12話（後書き）

最初が暗すぎたので、少し平和な感じを出していきたいと思っています
^^

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第13話（前書き）

・・・少し悩みましたが投稿！

コリイの正体が明らかになります

第13話

NOSIDE・・・

イザックがルナの元に訪れて二週間が経った

ここはルナの家の中・・・そこには二つの人影があった

「・・・大分制御できるようになったね」

ルナは先程瞑想を終えたイザックにそう話しかけた

「・・・まあ最初よりは幾分かましになりましたね・・・ご迷惑を掛けました・・・」

「ほんとだよ全く・・・何回暗示に掛けられたことが・・・」

厄介だったよほんとに、とぼやくルナにイザックは苦笑を返す

「魔力を込めない通常の状態が”好意の錯覚”なんて将来絶対女たらしになるね」

「ははは・・・」

最近では上手く制御できるようになったのだが”暗示”の制御の練習中は

かなりしんどかった・・・主にルナが

「・・・いや・・・まさか、服脱いで迫ってくるとは・・・なんでもないです・・・」

練習中のことを思い出し口にしたイザックだったが物凄い形相でルナが睨んでいたので
即座に話題を中断した

「・・・ま・・・あんたの初な反応もいつもと違って可愛らしかったけどね」

「・・・」

形勢逆転である・・・ルナが迫ったときイザックの反応は・・・自ら頭を思い切り壁にぶつけ・・・気絶
イザックが気絶した瞬間ルナは正気を取り戻し・・・事なきを得たのだった

「・・・しょうがないじゃないですか・・・女の人の扱いなんて知らないんですし・・・」

「はいはい・・・そろそろ晩飯の時間だね・・・コリイ呼んできとくれ・・・」

あたしは街に買出しに言ってくるから

「了解です」

そう言っつてルナは港町に向け歩いていき、イザックはコリイの部屋に向かうのだった

イザックSIDE・・・

コンコン、とコリイの部屋のドアをノックする

「はい」と中から可愛い声が聞こえた

「イザックだ、飯の準備するから手伝ってくれ」

「はい、わかりました・・・すぐ行くんで待っていてください」

了承し、俺は先にキッチンに向かった・・・

「・・・」
「・・・」

あの後すぐにコリイは部屋から出てきたのだが・・・

「・・・」
「・・・」

今日は何故かいつもより無口だ・・・

物静かな子だとは思っていたが今日はいつもと何かが違う気がした

「（なんかあったのか？）」

そう思っただがなかなか聞きにくく黙々と夕飯の準備をしていく
ちなみにコリイは準備等を手伝ってもらっている・・・

すると突然・・・コリイが口を開いた

「・・・イザックさん・・・」
「なんだ？」

いきなり話しかけられて多少あせったものの何か言いたそうなコ
リイを見て

悟られないように問いかける

「・・・人間じゃないヒトって・・・どう思いますか？」
「・・・え？」
「・・・」

いきなり、そんなことを聞かれ少し混乱する

「・・・別に、どうって言われても・・・」

「怖いですか？」

「それは無い」

俺は返答に困っているときリイは「怖いか？」と聞いてきた
俺は自信を持ってそう答えたが、リイにとっては以外だったらしい

「何故ですか？」

「・・・俺がもし種族差別してるような奴だったらまずエルフであるルナさんに

会いに来たりしないだろう？それに・・・俺のいた孤児院にハーフエルフの子が

いたからな・・・」

「ハーフエルフ」・・・

その種族は人間とエルフの間に生まれ、人間でも、エルフでもない存在

そして、双方からも忌み嫌われる存在であつた・・・

「・・・自分と違う種族・・・それが何だ？・・・人間だって顔、性別、性格と

一人ひとり自分とは違う・・・なら種族が違っててもそれは俺の中では個性としてみる

・・・同じ・・・この世界で生きてるなら・・・そんなことごちやごちややってちゃ

いけないはずだ」

俺はそう自分が思つた意見を述べた

コリイはその意見が予想外だったらしく・・・狼狽していた

そして・・・一言・・・

「世界中の人間が・・・イザックさんみたいだったら・・・良かったのにな・・・」

「・・・どういう意味だ？」

少し泣き声でそう呟くコリイ
俺はその意味を尋ねた

「・・・イザックさん・・・私は人間ではないです・・・」

そう言いコリイは胸に手をあて、唇をかみ締めながら

「・・・私・・・天使なんです」

そう言ったと同時に・・・淡い水色の・・・透き通った羽が姿を現した

第13話（後書き）

コリイの正体は”天使”でした

ティルズの天使は一般的に知られている天使の羽とは結構違いますよね？

作中にもあるように白い羽ではなく透き通った羽で人によって様々な色をしています・・・

何か意味があるのでしょいか？

私にはわかりませんが、天使のキャラ（クラトスやコレット）は大好きなので

いつか絡ませてみたいと思います^^

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第14話（前書き）

ルナさんが・・・

とりあえず投稿！

第14話

NOSIDE・・・

「・・・天使？」

「はい・・・」

コリイは震える声でイザックにそう告げた

「・・・私は・・・奴隷として・・・この国に来ました・・・そしてその途中で

私は逃げ出し・・・迷い込んだこの森でルナさんに拾われました・

・

ルナさんは人見知りといザックさんに言いましたが・・・本当は怖かったただけなんです・・・自分が人間じゃないってことを誰かが知れば・・・また・・・あんな風に・・・人として扱われないんじゃないかって・・・」

小さな拳を力一杯握りながらコリイは続ける

イザックは黙ってコリイの話を聞いていた

「この羽も・・・連れて行かれた貴族の人に見せたら・・・『気持ち悪い』って

・・・その後違う場所に行くまでは・・・まともな扱いをしてくれませんでした」

コリイはイザックを見た・・・

大半が恐怖・・・そして・・・ほんの少しの希望が映る目で

そして・・・

「・・・イザックさんはどう思いますか？・・・この羽のことや・

天使のこと・・・」

そうコリイはイザックに問いかけた

イザックは・・・少し何かを考えてから・・・コリイに優しく笑いかけた

「・・・さつきも言っただろ？俺は種族なんて気にしない・・・天使だろうがなんだ

ろうがそれはそいつの個性だって・・・それに・・・その羽を気持ち悪いって言った

奴は目が腐ってるんじゃないか？・・・コリイのイメージに合っていないとてもきれいだと思うよ」

イザックはそう言った・・・

コリイの目が見開かれる

そして・・・涙が溢れ出した・・・

「・・・っ・・・すいません・・・つく・・・」

そつとイザックはコリイの頭に手を乗せる

「・・・もう・・・一人で抱え込まなくていいよ・・・コリイはもう、一人じゃない」

その言葉を聞き、コリイは声を上げて泣いた

今までどんなに辛くても・・・人前で泣いたりなんかしなかった

そのコリイが・・・大声で・・・泣いていた
イザックは黙って彼女の頭を撫でる
そしてイザックは彼女が泣き止むまで撫で続けた

「・・・大丈夫か？」
「はい・・・すいません」

一時間ほど泣き続け、コリイはようやく泣き止んだ
そしてイザックはコリイの肩に手を置き

「また辛いことがあったらちゃんと俺かルナさんに話してくれた

らしい・・・

わかったな？」

「・・・はい」

コリイは頷きイザックは満足そうに笑った

「よし・・・飯は・・・」

「あ・・・」

「・・・あ!？」

・・・話をしていたのですっかり忘れていた
夕飯の準備がまったくできていない

そして・・・

「ただいま、今日の夕飯は・・・」

ルナが帰ってきた・・・

そしてルナは見た

料理を途中で止めている+

コリイ涙目・・・+

イザック肩に手を置き若干青い顔+

何故かはだけている服（コリイは泣くと胸元の襟を引っ張って涙
を拭く）〃

以下ルナの妄想・・・

『イザックさん！やめてください！！』

『ゴメン・・・もう我慢できないんだ』

『ダメ・・・嫌なの！！』

『大丈夫・・・すぐに良くなる』

『あ・・・だめえ！！』

妄想終了・・・

「イザックウウウ！！！！！！」

「は、はい？・・・」

「お前！！コリイに手を出したな！！！！このロリコン！！！！」
「・・・は？」

イザックは夕飯ができていないことに怒られると思ったが・・・
予想外のことに混乱する

「え？何のことです？」

「問答無用！！！！天誅！！！！！！！！！！」

「え！？ちょ！！！？まっ・・・」

その後何かを殴る音と一週間ぶりにイザツクの悲鳴が轟くのであった

コリイSIDE・・・

あの後ルナさんの誤解を解くのに一時間、ようやく理解してくれたようだ・・・

「はぁ・・・疲れた」

私はそう呟き自分のベットに倒れこむ
本当に今日はいろいろあった

「（イザツクさん・・・）」

心の中で名前を呼んだ

私は・・・親の顔知らない

物心ついたころにはすでに奴隷だった

そして貴族は私を人ではなくものとして扱っていた

男の人に犯されかけたことだっただけである

みんな・・・私のことを見てくれない・・・

そう思ってた

でも・・・あの二人は違った

ルナさんは初めてここに来たとき空腹で死に掛けていた私に食べ物と居場所をくれた

イザックさんは他の人たちとは違い私の全てを受け入れてくれた・

・

二人は他の人と違った

必ず・・・

「私を・・・見てくれる」

そこが・・・違っていた

そして何より・・・嬉しかった

「（生きてて良かった・・・）」

心からそう思った

「（それにしても・・・）」

ベットについている枕に顔をうずめながら先程のイザックの言葉を思い出す

『コリイのイメージに合っていてとてもきれいだと思うよ』

先程は嬉しさのほうが上回っていたので思わなかったのだが・・・

「（は、恥ずかしい／＼／きれいって言われた・・・い、いや羽のことってわかってるけどきれい
って・・・）」

初めて言われた異性の甘い言葉を思い出し赤面し、コリイが寝付いたのは

深夜になってしまったのだとか・・・

第14話（後書き）

はい、ルナさんが暴走しました^^；

クールキャラにしようと思ってたんですが・・・やっぱり無理でした^^；

作者の力不足でして・・・許してください

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

閑話・・・スキット1（キャラ崩壊注意）（前書き）

テイルズⅡスキット

というあほな方程式が私の中にありまして書いてみました・・・

それではスキット（？）をどうぞ・・・

閑話・・・スキット1（キャラ崩壊注意）

『リンの料理』

「いやイザック・・・あんたの料理ほんとおいしいね！」

「それはどうも」

「・・・ちなみに・・・先生？つてひとの料理はどんなだったんですか？」

「・・・」

「・・・」

「あ、あの・・・どうして遠い目になってるんですか？」

「・・・ルナさん・・・先生の一番ましな料理ってどんなのですか？」

「・・・オムレツだね・・・中の肉がアックスビークだったけど・・・」

「・・・そうですか・・・俺のは・・・肉じゃがですかね・・・」

「じゃガイモがさつま芋でした」

「一番ひどい料理は・・・」

「・・・（ガタガタ）」（急に震えだすイザック）

「イ、イザック！？コリイ！！精神安定剤取っとくれ！！」

「え”！！は、はい！！」

『君もか・・・』

「練習終わったな・・・今日の飯は何だイザック？」

「今日はコリイが作るって・・・」

「・・・何？」

「いや、だから・・・コリイが・・・」

「・・・」(急に血の気をなくすルナ)

「どうしました？」

「・・・ちよつと町に言ってくる・・・」

「は？い、いや飯食ってからでいいじゃないですか？」

「・・・コリイは・・・」

「あ、ルナさ〜ん、イザックさ〜ん！」

「！？」(絶望に満ちた顔のルナ)

「お！コリイ・・・それなんだ？」

「これですか？サンドイッチです！！どうぞ」

「お！サンキュー・・・ルナさん食べないんですか？・・・なん

でキュアボトル

持つてるんですか・・・？」

「・・・すぐわかる」

「？・・・まあいいや、じゃあいただきます」

「はい」

「(パクッ)・・・(バタッ)」(一噛みして倒れたイザック)

「イザック！！しっかりしろおお！！飲め！早く飲めええ！！！！」

「・・・あれ？」

『その後日』

「・・・死ぬかと思いました」

「あたしのあの表情の意味・・・わかっただろ？」

「ええ・・・まさか・・・この吸血鬼の能力に助けられるなんて・・・」

「・・・いいかい？絶対にコリイに料理を作らしちゃいけない！」「わかってますよ・・・先生のよりひどいですから・・・」

「だろうな・・・ちなみに感想言っならどんな感じだ？」

「・・・この世のものじゃない」

「フタリトモ・・・？」

「「（ビクッ）」」

「・・・フッフ・・・聞こえてますよ・・・全部」（目に光が無
い）

「「（ダッ）」」（逃げ出す二人）

「逃がしません・・・！！」

「ちょ・・・弓！！」

「こ、コリイ！落ち着いとくれ！！！」

「ウッフッフ・・・」

「あああああー！！！」

「イザックウウウ！！！」

『年齢』

「イザックさんは年いくつなんですか？」

「17だ・・・コリイは？」

「15です」

「2つ違いか・・・そんなに離れてないんだな」

「そうですね、イザックさん大人っぽいですから」

「はは・・・思っただが・・・ルナさんって何歳なんだ？」

「・・・気になりますね」

「・・・エルフは見た目は若いからな・・・見た目は」
大事なことなので2回言った

「そうなる・・・もしかしたら結構いつてるかもしれませんね」

「そうだな・・・100歳とか？」

「どうでしょう？・・・実は1000歳とか!!」

「見た目若いから詐欺だな（笑）」

「全くですね」（微笑むコリイ）

「・・・おい」（ドス聞いた声）

「・・・」

「歯あ・・・食い縛れや・・・」（こめかみの血管がやばいくらい浮き出てるルナ）

「・・・（ダッ）」

「逃がすかああ!!」

「たすけてええええ!!!!!!!!」（泣きながら、走りながら叫ぶコリイ）

「殺されるうううう!!!!!!!!」（コリイ同様に叫ぶイザック）

「インプレイスエンド!!」

「ああああああ・・・!!!!」

「イザックさああああん!!!!」

「逃がさないよ・・・コリイ・・・」（超超いい笑顔のルナ）
「・・・いやああああ!!!!!!」

閑話・・・スキット1（キャラ崩壊注意）（後書き）

それぞれのスキットで・・・ボケとツツコミが違ってる・・・

どうでしたか？批判があったら・・・次回は考えます・・・

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第15話（前書き）

とりあえず投稿

次回からまた戦闘です

第15話

ルナSIDE・・・

「・・・やっと完全に制御できるようになったね」

「はい、おかげさまで」

イザックはそう言って笑う

この子が来て1ヵ月・・・ようやく3種類の”魔眼”の制御に成功した

「といっても”魔眼”の制御なんてやったことも無いっえ、魔術の扱いも平凡だった

イザックがこの期間で制御できるようになったのは賞賛に値する

「さて・・・あたしはこれからコリイに魔術と弓を教えなきゃならないんだが

・・・一緒に来るかい？」

「そうですね、どうせ暇ですし」

イザックと一緒に行くといったのであたしは心の中でガッツポーズした

「（あたしが楽だからねえ・・・）」

そう・・・イザックは飲み込みが尋常じゃなく早い

あたしが教えられるのは水、風、土の魔術と弓、槍の武器の扱いだ
そして家の書物の中に回復術の本がある

それらをイザックとコリイに教えているのだが・・・

「（イザックの奴・・・ほとんどマスターしてるからねえ・・・）」

「そう・・・この１ヶ月でほとんどマスターしてしまっているのだ
弓ではまだ負けないが、槍術ではもうあたしでは勝てないレベル
にまできている」

「それにこういった武術や魔術に対する貪欲さは半端が無かった・・・」

「回復術も本を読んでほとんど使えるようになってしまっていた」

「・・・全く・・・神は不平等だね」

「恐らく彼の才能を見た人全員に共通するだろう
それほどまでにすごい奴なのであった」

「ルナさん？どうしました？」

「いや、なんでもない・・・コリイが待ってる、早く行こう」

「はい」

「コリイを待たしてはいけない、あたしはそう思い、急いでイザックに駆け寄った」

「そして、彼のつける眼帯を見て一言告げた」

「もう大体制御できるようになった、イザックもこれでやっと眼帯がはずせるな」

「あまりつけていて良く思われるものではないのでそう言った
しかし、イザックから返ってきたのは意外な返事だった」

「そのことです……これ、全力で戦うとき意外はつけとくとにします」

「……なんでだ？見た目的にも似合ってはいるが……」

イザックは苦笑しながら

「別にそういう意味じゃなくて……ルナさんから貰った品ですから」

そう言った……

その一言にあたしは驚いた

「……そんなの気にしなくてもいいぞ？」

「いえ……俺がつけておきたいんで」

はつきりそう言った

「全く……」

こういったところは……ほんとに子供っぽいし……リンに似ている

薄く笑って一言

「ガキ」

「……否定しません」

そう言ってやると拗ねたようにそっぽを向いた

確かに……嫉妬するくらい才能に恵まれたイザックだが……
あたしの教え子には変わりが無い

だから・・・あたしは死ぬまで・・・この子を見ていようと思った
そして、力になれるなら・・・全力でこの子の力になろうと・・・
もうあたしの中では・・・この子もコリイも・・・大切な子にな
っていた

「早く行きましょう」

「ああ・・・」

そう思っているとイザックの声で現実に戻された
そして、イザックと共にコリイのところに向かった

NOSIDE・・・

「悪いコリイ・・・待たしたな」

「いえ全然です、もう制御の練習はいいんですか？」

「ああ」

「もう大丈夫だよ」

ルナは短く肯定し、イザックは薄く笑って答える

「じゃあ・・・弓の鍛錬から始めようかね・・・的用意してくれ」
「はい」

「じゃあ俺は弓の用意してきます」
「ああ頼んだよ」

いつもどおり、コリイの鍛錬が始まろうとしていた

そのとき・・・

「！？コリイ！！伏せろ！！！」

「え・・・？」

ルナの声に的を運んでいたコリイはしゃがみこんだ

ヒュン、と空を切る音がし・・・見ると木に矢が刺さっていた
コリイが立っていれば肩あたりに直撃している高さであった

「誰だ！！出て来い！！！」

ルナの怒声が響く

「・・・ちっ・・・外した・・・」
「当てるよアホ」

そして森の中から二人の人が現れた

「・・・何しに来た」

「・・・その天使・・・渡してもらおうか」

ルナの静かな問いに弓を持つ男が答えた

「さもなくば・・・殺すぜ？」

もう一人の男・・・ゴツイ図体に合った大きな斧を持っている男が舌なめずりしながらそう告げた

「・・・コリイをどうするつもりだい？」

「決まってるだろ！！貴族に売り渡すんだよ・・・なあ？」

ビクツとコリイの体が震える

「・・・久しぶりだな、お前が逃げたせいで・・・報酬をまだもらえてない」

「おとなしく捕まれ・・・な？」

ガタガタ、と震えるコリイ

そこに・・・

「アクアエッジ」

「エアスラスト！！」

「「！？」」

二つの術が詠唱された・・・もちろん行ったのは・・・

「渡すかよ・・・お前らなんか」

「イザツクの言つとおりだ．．．あたしが．．．コリイを縛るあんたたちを．．．」

屠つてやるよ．．．」

怒りに顔を染めたルナと弓をへし折つて怒りを示すイザツクであつた

第15話（後書き）

はい・・・意味わからん二人の登場です^^;

感想アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第16話（前書き）

書けたので投稿

ルナさん無双です

二つ名的なものが出てきますが・・・すごく安直です
ネーミングセンスが無いので・・・

それではどうぞ^^

第16話

NOSIDE・・・

「あぁん！？なめたこと言うアホ二人やな」

「・・・邪魔するのなら・・・排除するぞ？」

斧を持つ男は不機嫌そうにこちらを睨み、弓を持つ男は無機質な声でそう告げた

そんな二人を憤怒の表情で睨みつけるイザックとルナ・・・

「上等だ・・・排除できるんならしてみろ・・・」

「・・・身の程を知りな・・・糞蟲共」

「・・・ルナさん、弓の男の相手してください」

「・・・そのつもりだったよ・・・コリイに矢を放った男だよ？
ぼこぼこにしなきゃ気がすまないね」

「・・・ごちゃごちゃ何言ってやがる！！行くぞ！！」

「・・・言われなくても」

斧の男が我慢しきれなくなったのかこちらに突進してきた
弓の男は詠唱を始める

「・・・シャープネス」

「爆碎斬！！」

補助呪文が詠唱された瞬間斧の男は得物を振り下ろす

「・・・なるほど・・・この二人はコンビでそれなりにやってき

てるようですね」

「・・・だね・・・まあ・・・あたしの敵じゃないけどね・・・
陽炎!!」

「!？」

素直に男たちの連携に感心していると、ルナさんが動いた
目標の真上に瞬間移動し、落下しながら蹴りつける技である
弓を持つ男はルナさんを見失い、狼狽したところをルナさんが蹴
りつける

「マーク!!」

「・・・仕事中は名前を呼ぶな・・・大丈夫だ」

マークと呼ばれた男はルナの蹴りを受け倒れそうになるが瞬時に
受身を取った

「・・・あんたの相手はあたしだ・・・手加減しないから」

そしてルナは受身を取り膝についている弓の男、マークを冷たい
目で睨み

そう言い放った・・・

イザツクは・・・

「・・・おい、こら・・・仲間の心配じゃなく自分の心配をしろ」

斧の男に・・・怒りを隠そうともせず、激怒した顔で睨みつけた
そして、戦闘が始まった・・・

「・・・手加減しないってたが・・・得物も持たないあなたが
・・・俺に勝てるとは思えないが？」

・
・
マークは警戒を緩めることなくルナに弓を向けたままそう尋ねる・

「・・・そうだね、丸腰じゃ流石に厳しいね」
「・・・」

「でもね・・・あたしにあんな金属でできた得物なんていら
んだ」

「・・・何？」

意味がわからないといった風に再度狼狽してしまう
すると突然ルナは右手を横に突き出した

「・・・昔・・・こちら辺でちょっと有名だった”光の妖精^{エルフ}って
知ってるかい？」

「・・・20年ほど前から姿を消したって言うあれか？」

「・・・そんな前だっけ？覚えてないわ」

「・・・それがどうした・・・っ!？」

・
マークは何の話かわからずに苛立った風にルナを睨みつけるが・
すぐにその顔は驚き一色に変わってしまう

何故なら・・・ルナの手には淡い水色に光る・・・
槍が握られていたのだから・・・

「・・・魔力構成があたしの得意分野でね・・・水の魔力を具現化して武器を

作れるのさ・・・これがあたしの武器、『魔槍』・・・そして、
あたしが

さっきの話題を出したわけがわかっただろう？あたしがその・・・
”光の妖精”と

呼ばれたエルフさ！！手加減しない・・・徹底的に叩き潰してやる！！光龍槍！！」

「ちっ・・・！？」

マークは向かってくるルナの光龍槍を身をかがめて避ける
そして、彼女に向け弓を引き絞る、がそこに彼女の姿は無い

「（上！？）・・・！！！！！！」

ザン、と先程まで彼のいた地面がえぐられる

「・・・瞬迅槍！！」

しかし、そこからすぐさま攻撃態勢

マークは受け流すことができず直撃を食らう

「ぐ・・・！？」

「天雷槍月！」

「がはっ・・・！？」

マークは槍を叩きつけられ続く落雷もともに受けてしまう
落雷を受け・・・電流が走り麻痺して動けないマーク
そこに・・・冷たい目で見下ろすルナの姿が見えた

「ひっ・・・！？」

「・・・あたしの・・・家族を侮辱したんだ・・・痛い目見ても
らうよ」

そう告げるとルナは詠唱を始めた・・・
マークは麻痺した体を必死に動かそうともがく・・・が
結果は・・・絶対に覆らない

「くらいな・・・インブレイスエンド・・・」

「うああああああ！！！」

巨大な氷の塊を相手に落とす水属性最強術・・・インブレイスエ
ンド

完全に格が違う強さを見せつけたルナ
下半身が下敷きになり・・・気絶したマークを縄で縛りつけ
コリイのいる場所に戻る

「（コリイのところに行かないと・・・！？）」

こうして、マークは一撃も攻撃することが叶わず、ルナの圧勝に
終わった

第16話（後書き）

ルナさん強すぎた感が否めませんが・・・

まあ相手がそんなに強くなかったんだと思うといってください^^；

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第17話（前書き）

イザックの戦闘

魔眼を使つての初戦闘です！

第17話

イザツクSIDE・・・

「おい兄ちゃん・・・悪いことは言わん・・・そこをどきな」

斧を持った男が笑みを浮かべながらこちらに一步近づく

「断る・・・さっきも言っただ・・・コリイは渡さないと」

「・・・こっちは商売なんだ」

「・・・人を売るのが商売？ふざけたことを・・・余計渡すわけにはいかない」

「そうかい・・・じゃあ・・・死ねよ!!」

やはり、強行策で来るようだ・・・斧の男は先程と同じようにこちらに

突進してくる

「おらあ!!爆碎斬!!」

「・・・それしかできないのか・・・!!」

またも斧を地面に叩きつけ石つぶてをこちらに飛ばしてくる
俺は剣を抜きその全てをはじき返す

「瞬迅剣!!」

「甘い!!発!!」

「ちっ!？」

「おらあ!!獅子戦吼!!」

イザックはすばやく剣を突き出すが、相手の闘気の爆発に吹き飛ばされる

受身に成功したがすぐさま斧の男はイザックを吹き飛ばそうと技を放つが・・・

俺は身を低くし、獅子戦吼をかわす、そして

「散沙雨！！秋沙雨！！」

「ぐお・・・ぬう」

「驟雨双破斬！！！」

連続にして25回の突きを食らった斧の男
たまらずに膝をついた

「ちつ・・・やるな兄ちゃん・・・」

呻く斧の男はゆっくりと立ち上がった

「・・・だが！！負けるわけにはいかねえんだ！！！」

うおおおお、と声を張り上げながら再び突進してくる斧の男

「・・・降参してくれば楽だったんだが・・・いいだろう」

そう言いイザックは眼帯をはずした

「・・・」魔眼”壱の型・・・発動・・・『ビジョン・エターナ永遠の幻』！！」

眼帯をはずした目を開く

その目は・・・真っ赤に染まり・・・まるで血のように濃かった

そして・・・斧の男は・・・その目をしっかりと見てしまった・・・

男は意識が遠のき・・・視界は黒に染まった

そして男は目を覚ました・・・

「あ・・・あれ・・・俺なんでこんなところに・・・」

そして周りを見渡すと・・・見る限り荒野が広がっていた・・・

「（俺はたしか・・・天使を探しに森にいたはずじゃ・・・）」

ガチャン・・・と金属の音がする

「あ・・・？」

振り返るとそこには・・・数え切れないほどの骸骨が・・・鎧と
剣を持ってこちら

に向かってきていた・・・

「は・・・なんだよこれ・・・」

斧の男は後ずさり、逃げようと試みるが・・・

「は・・・？なんで・・・いつの間に！？」

後ろには先程まで無かった壁がそそり立っていた

ガチャンガチャン、と金属音が近寄ってくる

「く、くそおおおお!!」

覚悟を決めたのか、斧の男は骸骨の群れに突貫する

「おらあ!!・・・死ね・・・!シネエエ!!」

斧を振り回し、骸骨たちを破壊していく・・・
が・・・

「がつ・・・!」

直後、腹部に痛烈な痛みを感じる

思わず斧を落としてしまい、骸骨の群れの中に消える

「ひっ・・・!」

そして、骸骨は剣を振り上げる・・・

「うわあああああ!!」

そしてまた・・・斧の男の視界は黒に染まった

「イザツク!!」

ルナさんがこちらに駆け寄ってきた、そして・・・

「あんた・・・魔眼使ったのかい？」
「はい」

白目をむき、泡を吹きながら失禁している斧の男を見て
ルナさんは顔を引き攣らせる

「えぐいね・・・あんた」
「コリイを物扱いしたんです・・・これぐらい当然です」

そう言いきった俺にルナさんは苦笑いをする

「弓のほうも捕縛しておいた、後で港町の駐屯兵どもに渡してお
くよ」

「お願いします」
「・・・コリイのほうに行こう」
「・・・当然です。またあいつのことですからきつと私のせいで
とか言ってると思うんで」

俺とルナさんはこうしてコリイの元に走ったのだった

第17話（後書き）

はい、戦闘終了です^^；

いかがでしたか？

お見苦しい点は多々あると思いますが・・・

また感想などをもらえると嬉しいです^^

ちなみに魔眼の技名は『永遠の幻』をイタリア語にただけです・

・

それと、幻覚の種類は一応イザック自身がどんな感じの幻覚を見せるか

決めれるという設定で行きたいと思います^^；

第18話（前書き）

コリイSIDEです

どろどろー

第18話

コリイSIDE・・・

私は・・・矢の刺さった木の陰で震えていた・・・

「（また・・・あの人たちが・・・）」

忘れそうになっていた・・・いや、忘れたかった記憶がまた蘇った
奴隷であることを・・・

そして・・・初めて優しくしてくれた・・・あの二人に迷惑を掛
けてしまった

自分はここですつと震えていただけ・・・

「・・・やっぱり・・・私は・・・」

私は決意する・・・私がここにいたらきつと・・・また二人に迷
惑を掛けてしまう

「・・・ありがとう・・・ルナさん、イザックさん・・・さよな
ら」

私は歩き出す・・・恐らく近くに駐留しているであろう奴隷商人の
一団を目指して・・・

そのとき・・・私の手を掴むものが現れた・・・

「どこ行くんだいコリイ？」

ルナさんであつた
走つてきたのか呼吸を乱している

「・・・イザックさんは？」

「・・・なんか、あの二人だけじゃなかったらしくてさ・・・
他のやつが攻めてきたから相手してる。一人でいちゃ危険だから
あたしと一緒に・・・」

「・・・私・・・あの人たちのところに行きます」

私は正直にルナさんにそう告げる
瞬間、ルナさんの表情が固まった

「・・・何言つてんだい？」

「・・・もう・・・嫌なんです・・・私のせいでお二人に
迷惑を掛けるのが・・・」

「迷惑なんてあたしもイザックも思つてないよ」

「・・・でもあたしはきつと・・・二人といると甘えてしまうか
ら・・・」

今回みたいなことが起こつても・・・私は何もできないから・・・
だから・・・

迷惑を掛けないように・・・ここから出て行きます」

「ダメだつて・・・」

「もう放つておいてください！！！！」

私は止めてくるルナさんの手を振り払い叫ぶ

「私は！！奴隷なんです！！！！そして・・・貴方達みたいな強さ
も無い

弱い子なんです！！！！どうして止めるんですか！！！！どうして・
・・

やさしく・・・ずるんですか・・・」

最後のほうは泣いてしまっていて上手くしゃべれなかった・・・

「・・・迷惑がかかるって・・・わかってるのに・・・どうして捨てないんですか・・・」

ボロボロと・・・落ちる涙

止めれずに流れ続ける涙を・・・ルナさんはそっと拭った

「・・・あんたをあいつらに渡すなんて・・・できないよ・・・
もう

あんたに情が移っちゃってるしね・・・何日も一緒にいて・・・
生活

してきたあんたを・・・わざわざ辛い思いをするとわかってるところに

渡すなんて・・・あたしにはできない」

そしてルナさんは言葉を続けた

・
「まだあんたもイザツクもここに来て少ししか経ってないけど・・・

あたしにとっては息子と娘みたいに思ってる・・・あんたはどうだい？

・・・あたしは・・・もう二人と別れたくないよ」

ルナさんは・・・少し不安そうな顔をしながら私に問いかけてきた

「・・・私だって・・・一緒にいたいです・・・」

「なら・・・一緒にいよう・・・あんたに害する奴が現れたなら・・・

・

あたしとイザックが追い払ってやる・・・安心しな・・・もうコ
リイは

・・・一人じゃない」

私は目を見開いた・・・

まだ涙は流れているが・・・少し笑って

「イザックさんも・・・同じこと言ってくれました」

「・・・だろう？・・・なんだかんだ言って・・・あの子はあた
しに似てるから」

ルナさんは嬉しそうに微笑んだ

そして・・・声が聞こえる

「・・・すいません！遅くなりました!!」

「ああ・・・大丈夫だったかい？」

「ええ・・・どうやら最初に来た二人がトップの二人だったみた
いです

・・・数で襲おうとしてきましたが問題なく全員捕縛しました」

「悪かったね・・・でもまあ・・・あんたの言うとおり、コリイは
やっぱり自分のせいだと思ってたみたいだね」

「でしょう？・・・全く・・・」

イザックさんはこちらに歩み寄ってきて頭に手を乗せた
そして・・・

「・・・もう少し・・・俺たちのこと信用してくれてもいいと思
うぞ」

苦笑しながらそう言った

「同感だね」

けらけらといつもどおり笑うルナさん

「さて・・・特訓はまた明日にして飯にしましょうか？」

「そうだね・・・ん？」

「どうしました？」

「ご飯にしようということなので家に入ろうとするとルナさんは立ち止まった

「ああ!!??ゆゑ、弓が・・・!!」

「「あ・・・」」

そう・・・ルナさんが作ってくれた自作の弓が真つ二つに折れるのだ

「・・・」

「・・・」

「・・・」

イザツクさんに視線が集まる

たしか・・・

『渡すかよ・・・お前らなんか』

第18話（後書き）

はい・・・どうでしたか？

コリイはこれから強くて優しい子にしていく予定です

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第19話（前書き）

ネタ回です^^；

コリイが明るくなる回にしようとしたら・・・
何故かこうなりました・・・

どうぞ！

第19話

NOSIDE・・・

そしてそれから一週間

コリイも前のような暗く無口な性格から一変し、たびたび笑顔を
見せ

三人で平和な生活をしていたのだが・・・

「・・・暇だな」

「そうっすね・・・」

ルナとイザックは家の椅子に腰掛けそう呟いていた

あの奴隷商人どもはイザックの暗示でこの森での出来事を忘れさ
した後、ルナが港町の

兵士に引き渡し、事件は解決した

「・・・そういえばコリイはどうしたんですか？」

「さあ？・・・今日は朝からみてないね」

不思議に思った二人だったが特にどうということも無いのでスルー
そしてまた

「・・・暇だな」

「・・・暇ですね・・・」

無駄に時間を過ごしている二人だった

一方・・・コリイは

「・・・」
「・・・」

物凄い勢いで何かを編んでいた・・・
女物の服を編んでいるようだ・・・コリイが着るには大き
すぎる

サイズである

そして・・・

「できた・・・やっと」

疲れの色が半端無い顔だったがコリイは歓喜の声を上げた

その服はワンピース、薄い水色をしてとてもシンプルなデザ

インである

「・・・ウフフ・・・楽しみです」

コリイは笑みを浮かべた・・・その笑みはどこか異様な笑みであった

「暇だな・・・」

「そうっすね・・・もう夕方ですよ」

朝から二人はこんな調子であつた

ひたすらルナが呟き、イザックが返す・・・
ただそれだけで半日以上過ごしていた

そこに

「イザックさん・・・ルナさん・・・」

コリイが現れた、後ろに何か隠した感じで・・・

「おう、コリイ・・・どうした？つてか今日なんで部屋から出てこなかったんだ？」

「・・・それよりコリイ・・・目のくまがひどいよ？寝てないのかい？」

イザックとルナはそれぞれ心配そうに声を掛ける
しかしコリイは嬉々とした表情で

「全然大丈夫です！・・・それより二人とも・・・これ、どう思いますか？」

そして先程から後ろ手に隠していたものを二人の前に出す・・・
それは

「・・・ワンピース？」

「へえ・・・上手じゃないかい！昨日糸をくれって言ってたのはこれを

作るためだったのかい？・・・それにしても、サイズでかくないかい？」

イザックは出された服をみて不思議に思い、ルナはコリイが作ったそれの

出来を素直に褒めていた、そして一つの疑問・・・

そう・・・サイズが大きいのだ

「あたしでも大きいよ？・・・採寸したのかい？」

「はい・・・もちろんです」

「ならなんで・・・」

「私のもルナさんのでもありません・・・イザックさんに着て貰いますから」

刹那、時間が止まった・・・

「「は・・・？」」

同時に声を上げたルナとイザック

「ですから・・・イザックさんに着てもらいます」

「・・・ちよつと待て、何で俺・・・？」

「そんなの簡単です・・・似合いそうだからです」

「なんてシンプルな理由なんだ・・・」

「感心してる場合じゃないでしょ！？コリイ・・・俺は男だ」

「百も承知です」

「なら・・・」

「一生懸命作ったんです・・・着て・・・もらえませんか？」

「ぐ・・・」

イザックは何とか逃げようとするがコリイのねだる顔にたじろぐ
コリイはつい先日辛い目にあっただけだ、だから自分のできる
ことなら

やってあげたい・・・が

「・・・流石に・・・ちよつと」

イザックも男であり着たくは無いだろっ・・・

しかし・・・

「面白そうだ・・・着ろ」

「ルナさん!？」

「だってほんとに似合いそうだし」

そう言っていつものようにけらけらと笑うルナさん
確かに、ルナのいうとおりなのだ

長く、白く、後ろで縛っている美しい髪

中性的ながらも可愛い顔

スラッとした細身の体型

長い足に、縛った髪の影響で覗くうなじには色気があるように見える

「・・・ちょっと・・・失礼・・・!」

マジで危険な空気になってきたので全力で逃げ出すイザック

が・・・

「ライティング」

「ぐわっ!？」

・・・見事にコリイの術がイザックに命中
イザックの全力の走りは目で追えないほど早いのに・・・恐るべしコリイ

「でかしたよ!!それ!!」

それを見たルナがどこから出したのかロープでイザツクを縛る

「ちよつと！？ほんとにまつ……」

「着せ替え〜〜〜!!!!!!」

「やめてくれええええ！！！」

数分後
・
・
・

「やっぱり似合うね」

「でしよう・・・私にも生きがいができました」

「
・
・
・
・
もうヤダ
・
・
・
」

いつもと同じく笑うルナと頬を赤らめうつとりするコリイ

そして・・・絶世の美女といっても過言ではない姿となったイザツク

その顔には疲労と絶望……羞恥ととにかくいろいろな混ざった顔をしながら

泣いていた

「次はどんな服がいいでしょうか？」

「メイド服とか？」

「やめろおおお!!!」

「いいですね！猫耳もつけましょう！！！」

「聞けえええええ!!」

心に

コリイは明るくなってよかったのだが・・・イザックはこれから傷を負うことになるのだった・・・

第19話（後書き）

イザックの容姿は・・・一応女よりの中世的ということであ
り・・・女装することになりました・・・

容姿の説明って難しいですね・・・

それぞれ皆さんはどんなイメージを持ってるんでしょうか？

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第20話（前書き）

とりあえず投稿

今回は吸血鬼関係の話です

どうぞ！

第20話

イザックSIDE・・・

奴隷商人の件も片付き、コリイにも笑顔が戻り平和な日が続いた
しかしその日々は、急に終わりを告げた

深夜・・・

ほとんどのものが眠りに落ちているであろうこの時間帯
俺は体に異変を感じ、苦しみの中にいた

「・・・ぐ・・・がは・・・！」

体が・・・焼けるように熱い・・・眼帯に隠している眼からは血が
流れ落ちていた・・・

「（この感覚・・・あの時と・・・）」

そう・・・酷似していた

彼が人間ではなくなった・・・あの時の感覚に

「（つく・・・くそお・・・）」

必死に痛みを堪え、耐え続ける
しかし・・・

意識は拒んでも・・・体は違った・・・

気づけば俺は・・・動いていた

ルナSIDE・・・

私は・・・異様な気配を感じ取り目を覚ました

「何だこの気配・・・」

警戒し、コリイの部屋に移動しようとしたとき

目の前に一つの人影が現れた・・・

「・・・イザック？」

声を掛けるが返事が無い・・・

いつものイザックではない

なにかが・・・何かが違っていた

「ル・・・ナ・・・ざ・・・ん・・・逃げ・・・」

ここまで言うといザックは・・・剣を手に襲い掛かってきた

NOSIDE・・・

ギイン、と響く金属音

ルナは咄嗟に魔力を練り槍を作りだし、イザックの攻撃を受け止める

「イザック！？どうした！！??」

ルナは明らかに動揺していた

「・・・ぐ・・・から・・・だが・・・い・・・うこ・・・と」

途切れ途切れに言葉をつむぐイザック

しかし、イザックの体は剣を振りかぶりルナに迫っていた

「・・・つく！」

「ウウウウ・・・！」

苦しそくに呻くイザック

そしてルナの頭に一つよぎった文があった

それは・・・昔研究していた・・・吸血鬼について・・・

それは・・・

『吸血衝動』である

それは、どうしても抑えられない吸血鬼の特性

それは理性では制御できず、異性の血を本能のまま求めるものだ

「（・・・最後にイザックが血を吸ったのは・・・確かエリックの血・・・異性の血

でもなければ舐めただけ・・・）・・・!?!」

剣を振り下ろし、ルナの槍との鏝迫り合いとなる

ルナが分析している間もイザックは襲い掛かってくる

「（・・・とりあえず動きを封じ・・・）・・・何っ！！??」

動きを封じることが前提に戦うことを決めたルナだったが
その前にイザックが行動を起こした
なんと、罅迫り合いをしていたルナの魔力で作った魔槍に噛み付いたのだ

そして、『魔槍』は消えうせ、イザックの剣はルナを斬り裂いた

「くっ・・・!？」

肩から血が流れ出す、痛みに一瞬氣をとられる
そして・・・

ダン、と音がるほど勢いよくイザックは床を蹴り・・・

「ガハッ!？」

ルナの首を片手で持ち、そのまま上に上げた

「がっ・・・」

息ができず、苦しむルナ
もがきながらイザックを蹴りつけるが全く動じない

そしてイザックは・・・鋭利な犬歯をむき出しにし・・・
ルナの首元に顔を近付ける・・・

「（・・・殺られる・・・!!!）」

そう思い目をきつく閉じた・・・そのとき

「ウィンドカッター!!」

小さな風の刃がイザックを切り裂いた

「・・・っ!?!」

突然の攻撃を予期してなかったのか、腕の痛みに思わずイザックはルナを落とした

その隙にルナは床を蹴り後退する

「・・・ごほ・・・すまないコリイ・・・助かったよ」

「いえ・・・あれは・・・イザックさんですか?」

「ああ・・・暴走してるみたいだが」

ルナの窮地を救ったのはコリイだった

恐らく物音が聞こえたので駆けつけたのだろう

「・・・どうでしょう?」

「一旦気絶させるしかないね・・・」

ルナはそう言いまた『魔槍』を構成した

「・・・コリイはとにかく術・・・当たるまでの時間はあたしが稼ぐから・・・」

「・・・自信ないですが・・・やります」

そうルナはいいコリイの返事を聞いてから突進した

第20話（後書き）

どうでしたか？

やはり吸血鬼といえはこれになるかなと思ひまして・・・

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6388y/>

テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー～吸血鬼物語～

2011年11月29日20時52分発行